平成十九年度　札幌大谷中学校【進学・音楽・美術コース】　入学学力試験問題　〈国語〉

出身小学校	小学校	受験番号	番	氏名

共通問題

一　次の文の主語を「先生は（が）」にした場合、どのように言いかえなければなりませんか。例にならってそれぞれ正しく直しなさい。

［例　食事をする。→（先生は）食事をなさる。］

ア　いつこちらへ来ますか。
イ　油絵をていねいに見る。
ウ　きれいな着物を着る。
エ　昼食を食べる。
オ　おもしろい本をくれた。

二　春子さんが国語辞典を引いてみると、同じ音なのに違う漢字をあてる言葉が多くありました。春子さんは辞書に出ている例文を並べて、その意味にあった漢字を書く練習をしました。みなさんもそれぞれの例文のカタカナにあてはまる漢字を書きましょう。

【イコウ】
①先生のイコウをくむ。
②江戸イコウ続く伝統。

【カンシン】
③よく我慢したとカンシンする。
④政治にカンシンをいだく。

【シジ】
⑤シジする政党。
⑥シジに従う。

【ショウメイ】
⑦ショウメイ機器
⑧数学の定理をショウメイする。

【タイショウ】
⑨比較タイショウする。
⑩女性をタイショウとする雑誌。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私の①住んでいるところは、省線まで②よほど離れているけれども、雨が降る前とか、天気の悪い時などには戸外の物音がはっきりきこえてくる。遠くを走っている省線電車の音がきこえる時は、雨だなと思う③のである。

④そればかりでなく、三味線の絃や、箏の絃でもわかる。絃がしめってくるし、それに音も冴えなくなる。今日は天気はよいが、二三日のうちには雨になるということも、たいてい予想ができる。

朝の気持ち、昼の気持ち、夜の気持ちは、目に見えなくとも、いろいろの物音や周囲の空気で、私にはそれと感じられるのである。自然の音は、自分が音楽をやっているだけに、最も親しいものである。同じ風でも松風の音、木枯らしの音、また、撫でるような柳の風、サラサラと音のする笹の葉など、一つ一つに趣のあるものである。

私は雨の音が好きである。⑤とりわけ春の雨はよいもので、軒から落ちる雨だれの音などきいていると、身も心も引き入れられてしまうような感じがする。

海の遠く鳴る音、滝の音、小川の流れ、谷川のせせらぎ、水車の静かに軋る音などはいずれも趣のあるものである。

私はまた、小鳥が好きで、都の中に住んでいると、自然の森や林で自由にさえずる鳥の音をきかぬことは淋しい。私は作曲に感興がわいて、自然の音にひたりたいと思うときなどは、いても立ってもいられない⑥ほど、懐かしい思いがする。

□はまったく、どれもこれも音楽でない⑦ものはない⑧。月なみな詩や音楽に現すよりも、□に耳をかたむける方が、どれだけ勝れた感興を覚える⑨かも知れない。私たちがどんなに努力しても、あの一つにも勝れたものは出来ない⑩であろう。

宮城道雄『音の世界』より

問一　〜〜〜〜線①「の」と同じ働きをするものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ケーキは甘いのが好きだ。
イ　あの本は図書館から借りたものだ。
ウ　札幌のおみやげに何を買おうか。
エ　君の来る日がとても待ち遠しい。
オ　桜の花びらで出来た美しい模様。

問二　━━線②「離れているけれども」・③「思うのである」の主語を書きなさい。
問三　═══線④「それ」の指す内容を文中の言葉を用いて書きなさい。
問四　〰〰線⑤「とりわけ」の係る言葉（修飾する言葉）を書きなさい。
問五　═══線⑦「ない」と同じ性質の言葉を〰〰線⑥⑧⑨⑩から一つ選び、記号で答えなさい。
問六　□には同じ言葉が入ります。その言葉を文中より四文字で書きぬきなさい。

四　次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

あたたかい島にて

北川冬彦

1　樹々がびっしり実をつけていた。
2　黄色い実。赤い実。青い実。
3　何という豊かさだ。
4　葉は厚ぼったくて、
5　冬をうけつけない。
6　道々の石崖には、
7　昆布のような草が垂れ下がっていた。
8　庭々は掃ききよめられ、
9　そこに立働く娘たちの
10　心はのびのびとし、
11　あたたかく美しい。
12　遠くで、山鳩が
13　しきりに鳴いていた。

問一　体言止めが用いられている行の番号を書きなさい。

問二　この詩の構成を次のように図式化しました。後の問いに答えなさい。

行	5―1	7―6	11―8	13―12
始まり	樹々	道々	庭々	遠くで
	覚		視	①
詩人の視線	②	草	娘たち	（山鳩）
視点の移動	上 ↓ 内へ	下 ↓ 面	心（凝縮）	
詩人が感じたこと	③ 冬をうけつけない ④	のびのびとしている	⑤	⑥

Ⅰ　表の①に入る言葉を漢字で書きなさい。
Ⅱ　表の②③⑤に入る言葉を詩のことばを用いて書きなさい。
Ⅲ　表の④に入れる言葉として最も適当のものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア　きびしさ　　イ　潔癖さ　　ウ　弱さ　　エ　強さ
Ⅳ　表の⑥に12・13行で詩人が表現しようとしたことを考えて書きなさい。（詩全体の構成をよく考えて書くこと）

進学・音楽・美術コース選択問題

五　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

鮨屋「福ずし」の常連客である年配の紳士に、鮨屋の看板娘のともよは、ある日偶然、その紳士がなぜ鮨が好きなのをたずねた。以下の場面は年配の紳士が子供だった頃の母との思い出話である。

子供は、ア〖ヘイキ〗を装って家のものと同じ食事をした。すぐ吐いた。口中や咽喉を極力無感覚に制御したつもりだが飲み下した食べものが、母親イ〖イガイ〗の女の手が触れたものと思う途端に、胃袋が不意に逆に絞り上げられた――女中の裾から出る剥げた赤い※ゆもじや飯炊婆さんの横顔になぞってある※黒びんつけの印象が胸の中を暴力のように掻き廻した。

兄と姉はいやな顔をした。父親は、子供を横顔でちらりと見たまま、知らん顔して晩酌の盃を傾けていた。母親は子供の吐きものを始末しながら、恨めしそうに父親の顔を見て

「それごらんなさい。あたしのせいばかりではないでしょう。この子はこういう性分です」

と嘆息した。しかし、父親に対して母親はなお、①おずおずはしていた。

その翌日であった。母親はウ〖アオバ〗の映りの濃く射す縁側へ新しいござを敷き、まな板だの庖丁だの水桶だの※蠅帳だの持ち出した。それもみな買い立ての真新しいものだった。

母親は自分とまな板をへだてた向側に子供を座らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は腕まくりして、薔薇いろの掌を差出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけてこすりながら言った。

「よくごらん、使う道具は、みんな新しいものだよ。それからこしらえる人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。わかったかい。わかったら、さ、そこで――」

母親は、鉢の中で炊きさましたエ〖ブンリョウ〗飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんこんむせた。それから母親はその鉢をそばに寄せて、中からいくらかの飯の

蠅帳の中には、すでに鮨の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひときれを取出してそれからちょっと押えて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼鮨だった。

「ほら、鮨だよ、おすしだよ。手々で、じかにつかんで食べてもよいのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするするなでられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交ったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合――それをひとつ食べてしまうと体を母に抛りつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うちに湧いた。

子供はおいしいと言うのが、〖あ〗ので、ただ、にいっと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蠅帳から具のひときれを取りだして押しつけ、子供の皿に置いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親は怖くない程度の※威丈高になって

「何でもありません、白い玉子焼だと思って食べればいいんです」

といった。

かくて、子供は、いかというものを生まれて初めて食べた。象牙のような〖い〗があって、生餅より、よっぽどオ〖ハギ〗れがよかった。子供はいか鮨を食べていたその冒険のさなか、詰めていた〖う〗のようなものを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかったことは、笑い顔でしかあらわさなかった。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取って口へ持って行くときに、おどかされるにおいに掠められたが、鼻を詰まらせて、思い切って口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、※咀嚼のために、上品なうま味につきくずされ、程よい滋味の圧感に混って、子供の細い咽喉へ通って行った。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が食べられたのだ――」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、②あたりを広く見回したい歓びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような歓びで、じっとしていられない手の指でつかみかいた。

「ひ　ひ　ひ　ひ」

むやみに甲高に子供は笑った。母親は、③勝利は自分のものだと見てとると、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落したりしてから、わざと落ちついて蠅帳のなかを子供に見せぬよう覗いて言った。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」

子供はいらだって絶叫する。
「すし！　すし」
母親は、嬉しいのをぐっと堪える少し呆けたような――それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして
「では、お客さまのお好みによりまして、次をさしあげまあす」
最初のときのように、薔薇いろの手を子供の眼の前に近づけ、母はまたも［　え　］のように裏と表を返して見せてから鮨を握り出した。同じような白い身の魚の鮨が握り出された。

岡本かの子　『鮨』より　（問題の都合上、一部の原文とは表現を変えています）

※　ゆもじ…女性が着物の下に着た肌着
黒びんつけ…耳ぎわの髪をおさえつけるための油
蠅帳…ハエなどが入るのを防ぎ、風通しをよくするために、網を張った小型の食品戸棚。
威丈高…人を威圧するような態度をとるさま
咀嚼…口の中で食べ物をよくかみくだき、味わうこと

問一　＝＝＝線ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線①「おずおず」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　悲しみでうろたえているさま。　イ　おそれてためらいながら物事をするさま。
ウ　はずかしいとも思わないで平気でいるさま。　エ　落ち着いて平気でいるさま。

問三　［　あ　］に入ることばとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　本心からではない　イ　申し訳ない　ウ　きまり悪い　エ　めんどうくさい

問四　［　い　］に入ることばとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　ざらつき　イ　かたさ　ウ　やわらかさ　エ　なめらかさ

問五　［　う　］に入る適当なことばを考えて、漢字一字で書きなさい。

問六　――線②「あたりを広く見回したい歓びを感じた」とはどのような気持ちを表現したのか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　母親との楽しい冒険のひとときを他のだれかに見られはしないかと心配している。
イ　今まで食べられなかったものを食べることができ、だれかにそのよろこびを伝えたいと感じている。
ウ　天気のよい外で、母親においしいものを食べさせてもらい、とても楽しくなっている。
エ　めったに食べることがないものを口にして感動し、自分の住む世界が変わったと感じている。

問七　――線③「勝利は自分のものだ」と思った母親の気持ちとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　この子が他人の料理を食べられないのは、自分のせいでないことを証明できて、晴れがましい気持ちになっている。
イ　これまで子供が味わったことのない感動を与え、大きな笑い声をあげさせることができて、うれしくなっている。
ウ　子供が好きではなかった魚のおいしさをわからせ、すしを食べたい気持ちにさせることができて、自信に満ちている。
エ　胃が弱く、好ききらいが多かった子供に、楽しく食事をとることの大切さを教えることができて、安心している。

問八　［　え　］に入る適当なことばを文中より漢字三字で書きぬきなさい。

六　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

子どもには遊びは必要だ。「ぼくはスパイダーマン！」と自転車で走り回ったり、おもちゃの鍋とスプーンでシチューを作るまねをしたり。そんな子どもたちの楽しそうなスガタ（ア）から、彼らが遊びを通してさまざまな力を身につけ、成長していくことが理解できる。

［　あ　］、遊びの中身はすっかり変わってしまった。テレビやコンピューターゲーム、携帯音楽プレーヤーにインターネット。テクノロジー全盛のこの時代に、子どもたちの想像力は絶滅の危機に瀕しているのか。「ごっこ遊び」は二十世紀の遺物なのか。

①こうした疑問に対する明快な答えはないし、議論するだけの十分なデータもない。ハイテクおもちゃゲームを擁護する声もある反面、子どもの知的発達に悪影響が生じたり、将来の創造性が損なわれたりすることを恐れる声も強まっている。「あらかじめプログラムされているおもちゃをどっさり与えれば、リッパな発明家が生まれるとでも思っているのか」と、エール大学の心理学者D・シンガーは言う。「そんなことをしても、仮説を立てて物事を考える力を子どもたちから奪うだけだ」

科学者がまず直面するのは、『［　い　］』とは何かという問題だ。シンガーと夫のジェロームは、子供と遊びに関する研究の中で、目に見えない物をイメージするために「象徴的に考えることのできる能力」とテイギ（ウ）している。想像力は複雑な思考プロセスの発達

になくてはならないものだ。「どうやって渋滞を抜ければいいのか」という現実的な問題解決から、「宇宙はどれくらい大きいのか」という［　う　］な思考まで、ことごとく想像力がかかわっている。私たちが、未知のものについて考えをめぐらすことができるのは、想像力のおかげだ。私たちの想像力は、人生のかなり早い段階ではぐくまれる。この時期に、生涯にわたる想像力の基礎が築かれるのだ。「想像力は人間の精神活動の土台だ」と、オレゴン大学の心理学者M・テーラーは言う。

子供はごっこ遊びをするとき、想像力を駆使している。エタンジュンなブロック遊びや人形遊びは、古くさくて退屈にみえるかもしれない。しかし、特定のルールやオセイゲンがないので、子供たちは自由な発想で遊ぶことができる。「洗濯機の入っていた段ボールの箱が宇宙船にもなるし、潜水艦や列車にもなる」と、子供と遊びに関する研究や活動を行っているNPO（非営利組織）「タッチ・ザ・フューチャー」の共同設立者M・メンディーザは言う。

子どもの脳内で想像力が発達しはじめるのは、言葉を話すようになるのとほぼ同時期らしい。シンガー夫妻の調査によれば、想像力をたくさん使って遊ぶ子どもは、想像力をあまり使わずに遊ぶ子どもよりもおおむね語いの広がり方が早い。遊びの中で、子どもは集中力を鍛えていく。友達をつくったり、感情を表現したり、運動能力を養う機会も得られる。シンガー夫妻の調査では、ごっこ遊びが好きな子どもはよく笑い、あまり攻撃的にならないとの結果が出ている。

研究者の間では、ハイテクを利用した娯楽やおもちゃの影響で、想像力を使った遊びが減っていると指摘する声がある。子どもの語いと作文能力が著しく低下したと話すのは、ベルギーで二十年にわたり小学校の教師をしているF・クロソン。「十年ほど前に、子どもたちの想像力と創造性ががたんと落ちた」クロアチアで教師をしているV・タラジッチは、出来合いの言葉に頼る子どもたちの存在を指摘する。「彼らは授業中に、［　え　］の音声やセリフをそのまま口にする」そうした子どもは、主体的な遊びをする能力が低いという。コンピューターゲームなどないほうが「子どもたちは独創的に考えて、船乗りごっこをしたり、ままごとができる」と、タラジッチは言う。絵を描かせようとしても、②途方に暮れて紙を見つめているだけの子どもが多いと話すのは、フランスの心理学者ソフィーカロリン・ポティエだ。「自分では何もつくり出せない、何も出てこないのだ」とポティエは言う。

［　お　］、子どもの想像力が減退しているとは言いきれないと考える研究者もいる。オレゴン大学のテーラーの調査によれば、子どもたちの「［　か　］」二百七十三人のうち、バットマンやスーパーマンといったスーパーヒーローの名前で呼ばれていたのは、三パーセントしかいなかった。「子どもたちは自分だけの、とても独創的なキャラクターをつくり出している」と、テーラーは言う。

しかし、子どもたちの将来を不安視する専門家は多い。子どものころに想像力をうまく発達させられないと、その影響は後々まで及ぶ。ケース・ウェスタン・リザーブ大学の心理学者S・ルスは、百二十一人の小学一年生と二年生を対象に調査を実施した。すると、ブロックや人形で遊ぶときに想像力を活用し、感情を豊かに表現する子どもほど、創造性を測るテストで好成績を示した。四年後、ルスはこのうち三十一人を再調査した。前回の調査でとくに想像力を発揮した子どもは、今回も創造性のテストで高い成績を記録した。「遊び上手な子どもは、大きくなってからも創造性を発揮する。日々の問題についても、なんらかの解決策を見つけられる可能性が高い」とルスは言う。

クロディア・カルプ　『生きる力をはぐくむ自由な遊び』より（問題の都合上、一部原文とは表現を変えています）

問一　＝＝＝線ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線①「こうした疑問」を三〇字以上四〇字以内で説明した一文を文中からぬき出し、その最初の五字を答えなさい。

問三　［　あ　］に入ることばとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　しかし　　イ　たとえば　　ウ　また　　エ　つまり

問四　［　い　］に入る適当なことばを文中より漢字三字で書きぬきなさい。

問五　［　う　］に入ることばとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　空想的　　イ　具体的　　ウ　抽象的　　エ　精神的

問六　［　え　］に入る適当なことばを文中より一〇字で書きぬきなさい。

問七　――線②「途方に暮れる」の意味として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　全くやる気が起きず、何もできない。　　イ　情けなく、みじめになってしまう。

ウ　あれこれ考えすぎて、まとまらない。　　エ　方法や手段がなく、どうしてよいかわからなくなる。

問八　［　お　］に入ることばとして適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　やはり　　イ　もっとも　　ウ　なるほど　　エ　少しも

問九　［　か　］に入る適当なことばを文中より六字で書きぬきなさい。

問十　文中には次の一文が欠けています。この一文を適切なところに入れた場合、この一文の直後にくる文の最初の五字をぬき出しなさい。

> また、動詞の使い方も上手で、仮定法といった複雑な文法も使いこなせるという。